

## 調査研究

# 高校国語科 新学習指導要領における言語活動の充実

～伝え合う場の設定による思考力・判断力・表現力を高める授業展開～

【ダイジェスト版】

長崎県教育センター

教科・経営研修班課 高校教育研修班

畑野公昭

### 1 はじめに

「教師がいかにかえるか」から「子どもたちがいかにか学ぶか」へと授業の視点の転換が必要な今、言語活動は子どもたちが学びを深める重要な手立ての一つである。言語活動を取り入れた授業では、より緻密な教材研究と周到な授業計画、生徒の表現に即応した適切な評価や指導が必要となり、教師の力量はこれまで以上に試される。これからの時代の中で、子どもたちが「生きる力」を獲得する学びの場をつくるためには、説明と一問一答を中心とした授業の見直しを図りつつ、生徒の学びの質を上げていくような授業改善に取り組むことが高校の国語科の課題といえる。その一助として本稿を参考にしていただけると幸いである。

### 2 新学習指導要領における言語活動とは

#### (1) 言語活動の目的・ねらい

言語活動の目的・ねらいは、それ自体の能力を高めることではなく、言語活動を通してどのような力を高めるのかにある。平成20年の中教審答申では、諸調査による児童生徒の学力・学習状況の実態に基づき、

思考力・判断力・表現力等を確実にはぐくむ

ために言語活動を充実させることを取り上げている。

また、国語科においては、「言語の教育としての立場を一層重視」し、「実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること」等に重点を置いて内容の改善を図り、

- ・言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して伝え合う能力を育成すること
- ・我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむこと

を重視するように求めている。

したがって、授業で言語活動を設定する際は、①論理的思考力・表現力、②伝え合う力、③感性や情緒をはぐくむものとなり得るように工夫することが重要である。特に、「伝

え合う場」を効果的に取り入れた授業は、「伝え合う能力」を高めることのみならず、子どもたちに学ぶことの意味を実感させ、子どもたちの主体性や能動性を引き出すとともに学習意欲を高める契機となる。

## (2) 言語活動の内容

言語活動の方法や内容等について、中学校、高校の学習指導要領や教科書に挙げられているものを中心にして表1に整理してみた。

一通り「話す・聞く」「読む」「書く」「基礎的・基本的事項」の領域別に個々の言語活動を整理したが、それぞれの言語活動は、異なった領域の力を伸ばすために設定される場合もある。

主に話す・聞く言語活動	発表、報告、討論、説明、表明、話し合い、インタビュー、シンポジウム、スピーチ、ディスカッション、ディベート、パネルディスカッション、バズセッション、プレゼンテーション、ブレインストーミング、ポスターセッション 等
主に書く言語活動	<p>&lt;形式&gt;</p> 短作文、長作文、レポート、記述解答、マッピング、フローチャート、図式、メモ 等
	<p>&lt;内容&gt;</p> 感想文、随筆、創作（小説・物語・詩歌）、批評文、鑑賞文、戯曲・脚本、説明文・意見文、論文（小論文）、案内文・報告文、手紙・通知、書評、新聞記事、広告カード、パンフレット、要約文、詳述文 等
主に読む言語活動	音読、朗読、斉読、群読、黙読、作業読み、暗唱、読み比べ、メディア情報の読み取り、論理構成の分析、思想や感情の把握 等
基礎的・基本的事項に関する言語活動	漢字の書取りや読みの習得、語句の意味の調査、視写、聴写、文語や訓読のきまりの理解 等

表1 言語活動の方法や内容等

## 3 言語活動の進め方

### (1) できることから取り組んでみる

文部科学省から出されている言語活動のリーフレットには、何も特異な例が示されているわけではない。むしろ、できる範囲で従来の授業形式の改善を試み、授業の活性化を図ろうとするものである。(図1)したがって高校における言語活動は、従来の教科指導の在り方を基盤に置きながら、社会における実践的な場面に即した言語活動をできるところから取り入れ、広げていくことを念頭に置いて取り組んでいく必要がある。

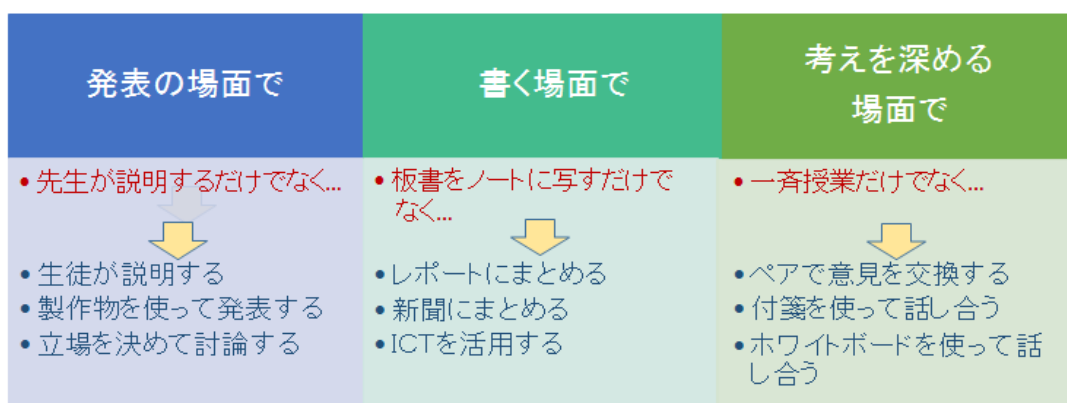


図1 「例えばこんな言語活動で授業改善」(文科省リーフレットをもとに作成)

## (2) 学校全体の言語活動の計画

「言語活動の充実を図る全体計画と授業の工夫」(独立行政法人教員研修センター2010)では、各教科等の言語活動を充実する上で「国語科で培った能力を基本に」することが中教審答申で示され、ことを受けて、「教育課程全体における国語科の役割の明確化」と「国語科の授業改善」が期待されていることが指摘され、言語活動を「国語科をはじめ学校全体で、カリキュラム・マネジメントの視点に立った教育課程」の中に据えるよう求められた。また、言語活動の充実のために、

- ・ 学校の教育活動全体で組織的・計画的に行うこと
- ・ 児童生徒の実態、発達の段階に応じて行うこと

が必要なこととして示されている。

したがって、国語科として身に付けさせたい言語能力や言語活動を設定する際に、学校全体における言語能力の育成や言語活動の在り方との関連を図りつつ、他教科や総合的な学習等と連携することが求められよう。その際、単年度のみならず、3年間を見通して身に付けさせたい言語能力と、その能力を高めるのにふさわしい言語活動について総合的に計画することが重要である。また、言語活動に関わる情報の交換や共有、取組の調整を図る場の設定が様々なレベルが必要である。(図2参照)

したがって、学校全体における言語能力の育成や言語活動の在り方との関連を図りつつ、他教科や総合的な学習等と連携することが求められよう。その際、単年度のみならず、3年間を見通して身に付けさせたい言語能力と、その能力を高めるのにふさわしい言語活動について総合的に

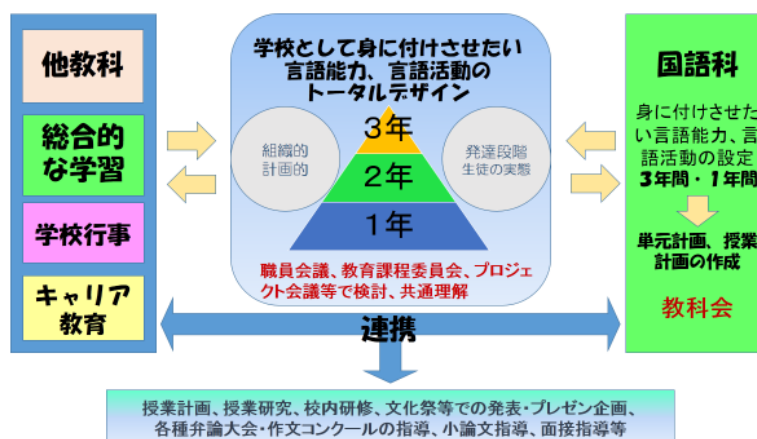


図2 学校における言語活動の連携モデル

に計画することが重要である。また、言語活動に関わる情報の交換や共有、取組の調整を図る場の設定が様々なレベルが必要である。(図2参照)

### (3) 言語活動を進める具体的な手順・方法

#### ① 単元の目標を実現するのにふさわしい言語活動を設定する

言語活動は、各科目の学習指導要領で示されている指導事項に沿って設定した単元の目標を実現するのにふさわしい方法・内容のものを設定する必要がある。たとえば、文部科学省では表2のような言語活動の指導事例を示している。

	単元の目標	言語活動
国語総合 (小説)	文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読む。(読む能力)	小説の設定を変えて書き換えること。ポップ(広告)を作ること。
国語総合 (古典)	文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図を捉えたりする。(読む能力)	古典を脚本に書き換えること。
国語総合 (古典)	文章の内容を必要に応じて要約したり詳述したりする。(読む能力)	漢文に書かれている情報を取捨選択して、新聞の形式でまとめること。
国語表現	話題や題材に応じて情報を収集し、分析して、自分の考えをまとめたり深めたりする。(書く能力)	相手や目的に応じて、報告のための文章をまとめること。
現代文A	言語文化についての課題を設定し、様々な文章を読んで探究する。(読む能力)	「恋愛と友情の狭間」をテーマにして文章を読み比べ、批評文を書くこと。
現代文B	目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現する。(書く能力)	ICTを用いて発表用資料を作成すること。
古典A	古典の和歌の調子を味わう。(読む能力)	百人一首カルタ(百人一首クイズを含む)をすること。
古典B	古典を読んで、人間、社会、自然などに対する思想や感情を的確に捉え、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにする。(読む能力)	源氏物語の複数の現代語訳を読み比べ、それぞれの共通点や相違点、書き手の源氏物語の読み方の特徴についてまとめ、説明したり、話し合ったりすること。

表2 指導事例一覧(「言語活動の充実に関する指導事例集」文部科学省2012をもとに作成)

ここでは、社会人となっても活用できる、多様で実践的な指導事例が示されている。単元の目標を実現するのにふさわしい言語活動の設定は、教師自身の創意工夫によるところが大きい。社会における日常的なコミュニケーションの場面、様々なメディアを活用した情報伝達・情報交換の場面、特別な立場や人間関係を想定した場面等を設

定したり、P2の表1にあるような言語活動の方法や内容を効果的に取り入れたりすることを通して、生徒の意欲・関心を高め、学びの実感をもたせることができるような言語活動の工夫を期待したい。

## ② 言語活動の具体的なプロセスを構築する

言語活動は、それ自体が目的ではなく、基本的には「思考力・判断力・表現力等を確実に高める」ことや「伝え合う力を高める」ためのツールとしての性格を帯びている。したがって、言語活動を取り入れるに当たって、どのような力や態度を高めるための活動なのか、よく検討する必要がある。

一見すると活発な言語活動のように見えても、その内実が十分でない場合がある。表面的な言語活動の動きに満足して、深く思考する力を育てる場になり得ていなかったり、「活動あって指導なし」の状態が生まれたりする可能性もある。

したがって、言語活動を授業の中に仕組んでいく際には、まず、そのねらいを明確にし、そのねらいに対して言語活動の方法、内容、時間、人数等が妥当であるかを十分に検討し、言語活動の質や内容が充実す

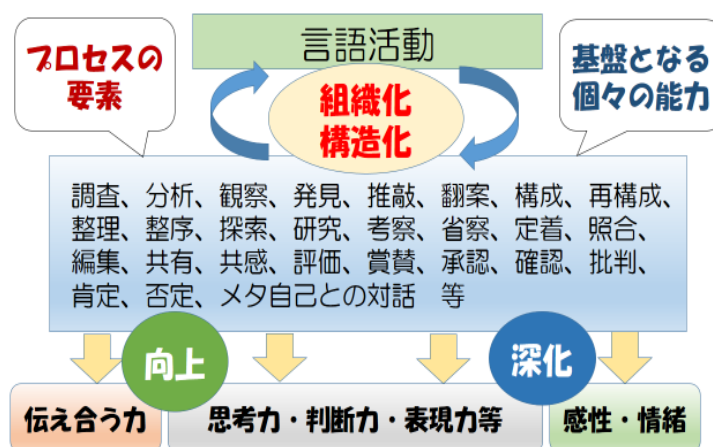


図3 言語活動を仕組むプロセスの概念図

るように学習活動や指導のプロセスを構築する必要がある。

その際、言語活動が、具体的にどのような作業プロセスや基盤とする能力等の育成を通して単元の目標を実現していくかについて、組織化、構造化を図っていくことが、言語活動を表面的なもので終わらせないためには重要である。（図3参照）

言語活動をプロセス化する中で、基盤となる能力等として、

調査、分析、観察、発見、推敲、翻案、構成、再構成、整理、整序、探索、研究、考察、省察、定着、照合、編集、共有、共感、評価、賞賛、承認、確認、批判、肯定、否定 メタ自己との対話 等

を挙げることができる。主にどのような能力の育成を通して、「伝え合う力」や「思考力・判断力・表現力等」や「感性・情緒」を高めるかについて、単元計画や授業計画を立てる際に、十分練っておく必要がある。その際、基盤となる能力のどれに焦点を当てるか、またどのように組合せてどのような順序で組織化するかについては、単元の目標や生徒の実態に応じて、様々な工夫が考えられる。

以上を踏まえて、従来型の授業と言語活動型の授業の具体的な展開例（図4）を比較してみた。図4では、ペア学習を中心とした言語活動による授業展開を具体例として挙げたが、生徒個々の主体的な参加による学びのプロセスは、従来型の授業に比べてより密度の高いものとなりそうである。また、表1に見られる言語活動のバリエーションと図3の基盤とする能力等との組み合わせ方には無限の可能性があり、発達段階や生徒の実態等を踏まえて、どのような組み合わせを選択し計画化するかは教師の手に委ねられている。特に言語活動を通して育成が求められている「論理的思考力・表現力」については、分析力や構成力を中心にどのようなプロセスを経てその力を高めていくかが工夫のしどころである。

### ③ 言語活動の実質を高める指導を行う

言語活動の計画は綿密に立てられているが、実際は生徒の活動が期待したとおりに実現できないこともある。生徒の話し合いが停滞する、議論が深まらない、成果物が表面的に終わる等、十分な基盤づくりや適切な指導や配慮が不足すると言語活動は不十分な取組に終わってしまう可能性がある。したがって、そのリスクを乗り越えて効果的な言語活動を取り入れた授業を実践するためには、

ア 生徒が言語活動に協働して取り組みやすい環境をつくる

イ 生徒が十分に力を出し、集中して言語活動に取り組めるように働きかける

といった指導が必要である。

充実した言語活動を行うためには、生徒が安心して表現できる場をつくることと、言語活動が学力の向上や感性の深化等につながる効果的な働きかけを教師が並行して行うことが重要である。

### ④ 言語活動で得られた成果を適切に評価する

言語活動そのものは、「目標の実現に資するもの」という位置付けであることから、「評価として必ずしも記録に残す必要はない」「全員について評価しなくてもよい」とされている。（「言語活動の充実を図る全体計画と授業の工夫」（独立行政法人教員研修センター 2010））したがって、「言語活動を通して指導事項を指導する」という考え方からすると、評価の対象は、基本的に学習指導要領の指導事項をもとに設定した単元の目標に対する実現状況であり、その判断は、教材を踏まえて具体的に設定された評価規準による。

ただ、言語活動そのものは評価の対象外であるとしても、言語活動が効果的に行われたか否かが目標の実現状況に深くかかわるのであって、言語活動が身に付けさせたい力に収斂していくような授業づくりとその授業における適切な到達度を示した評価規準を設定することが重要である。

科目：国語総合		教材：「水の東西」山崎正和	
発問：『鹿おどし』は、日本人が水を鑑賞する行為の極致を表す仕掛けだと言えるかもしれない。」と筆者が言うのはなぜか、本文の内容をもとにまとめよう。			
従来型		言語活動型1	
<p>1 個々の生徒が授業時間内にノートにまとめる。</p> <p>2 数名の生徒に発表させ、教師がコメントする。</p> <p>★表明は数名。照合や分析は間接的で、取組に個人差が生じやすい。</p> <p>3 教師が示した模範文例を生徒が書き写す。</p> <p>★生徒は受身的。模範文例との照合で作業が終わり、まとめるプロセス段階での省察が不十分になりがち。論理的思考力や表現力の育成との接点が見えにくい。</p>		<p>1 個々の生徒が家庭学習としてノートにまとめてくる。</p> <p>☆言語活動の時間を授業内に確保するためには、効率的な授業計画や家庭学習との連携を工夫する必要がある。</p> <p>2 ペア・グループ学習で相互に見せ合い、相違点や改善点を指摘し合って、各自が補足、修正を図る。</p> <p>☆次のような活動の指示を出す。かける時間を明示する。</p> <p>表明 考えを伝え合う 比較 相違点を確認する 分析 違いの理由を考える 評価 妥当性を論理的に判断する 再構成 改善を図る</p>	
言語活動型2		3 教師が、生徒の文例をもとに良い点や補足すべきことを挙手で確認したり、生徒に発言させたりしつつ共有を図り、ファシリテーション的な手法でまとめていく。	
<p>(右の言語活動型とは別の流れ)</p> <p>1 個々の生徒がノートにまとめる。</p> <p>2 個々の生徒の意見を発表させたり板書させたりして全体で共有する。</p> <p>☆実物投影机やタブレット等のICT機器を活用した効率的な授業を運営して、言語活動の時間の確保や質の向上等の工夫を試みることができる。</p> <p>3 共有したものに対して、ペア・グループ学習で、課題や改善点を検討する。</p> <p>☆比較、分析、評価、再構成等の観点。</p> <p>4 ペア・グループ学習で検討したことをもとに、個々の生徒がまとめ直す。</p> <p>5 まとめ直したものを教師が回収し、点検したり、添削したりする。</p> <p>☆言語活動による目標の達成状況を評価する材料とすることができる。</p> <p>6 次時に回収したものを返却するとともによい文例を紹介したり、ポイントの確認を行ったりして、検証を図る。</p>		<p>☆生徒の自発性や当事者意識を引き出しつつ、協働してよりよい成果を生み出す表現活動を進める。教師自身の対話力や多様な授業展開への準備も必要となる。</p> <p>☆まとめの過程では、</p> <p>①『鹿おどし』の仕掛けの特徴 ②日本人の水を鑑賞する行為の特質 ③西洋人の水を鑑賞する行為の特質 ④①～③を論理的に結び付けた「極致を表す」と言える理由 といったポイントの到達度を検証する。</p> <p>4 自己評価を行う。</p> <p>☆以下の点を振り返り、省察する。</p> <p>①本文における筆者の論理性 ②学習者の思考プロセスにおける論理性 ③学習者がまとめた内容の妥当性</p>	

図4 従来型と言語活動型の具体的な授業展開例

評価方法については、「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 国語）」（国立教育政策研究所 教育課程センター 2012）において、

観察、生徒との対話、ノート、ワークシート、学習カード、作品、レポート、ペーパーテスト、質問紙、面接などの様々な評価方法の中から、その場面における生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択していくことが必要である。

と示されている。したがって、言語活動自体は評価の対象とならないにしても、言語活動のプロセスにおいて、単元で設定した「関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」「知識・理解」の目標に対する実現状況を上記のような方法できめ細かく確認して指導につなげるとともに、評価の材料を集め、最終的な成果物と合わせて総合的かつ適切に評価できるように工夫することが大切である。

#### （４）言語活動を進めるポイント

高等学校における言語活動のポイントは、

- ・ 中学校までの言語活動の取組を知ること
- ・ 高等学校として取り組むべき適切な言語活動を設定すること
- ・ 言語活動に学びの実質を伴わせること
- ・ 言語活動を通じた学習に対する指導や評価のポイントを絞ること
- ・ 言語活動を通じた学習への指導の連続性、継続性を確保すること

とまとめることができる。高等学校としての言語活動について、教科担当者が創意工夫を重ね、実際の社会生活でも活用できる優れた実践が出てくることを期待したい。

### 4 伝え合う場の設定を生かした言語活動の在り方

「伝え合う力」を高めるためには、「伝え合う場」の設定が必要である。「伝え合う場」では、「話し合う、聞き合う、書き合う、読み合う」といった双方向的なコミュニケーションを通して、様々な力を育成する可能性がある（図5参照）。

教師が、ペア学習、グループ学習、作品回覧など言語活動のねらいに応じた適切な伝え合う場を設定し、表現の主体者と受容者が相補的に力を付けていくことができるようなプロセスを構築することができれば、「伝え合う場」は、効果的な「学びの場」になる。表現の主体者である「話し手・書き手」と受容者である「聞き手・読み手」は、

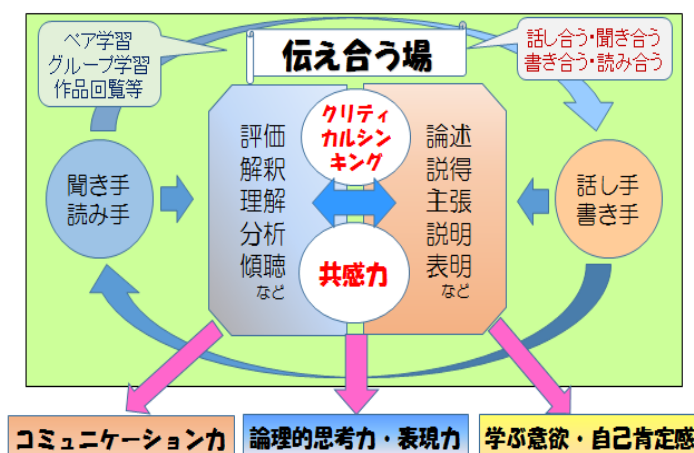


図5 「伝え合う場」における学習活動の概念図



伝え合う場の中で常に入れ替わることができる。互いの意見の共通点や相違点について、立場を変えて確認し合う中で、共感する力やクリティカルシンキングが醸成され、さらには、コミュニケーションへの意欲や相手から認められることによる自己肯定感を生み出していく。また、聞き手や読み手を直接的に意識した論述等は、実践的な論理的思考力・表現力を育成することにもつながる。

## 5 終わりに

平成24、25年度の調査研究では、西彼杵高校の白石愛子教諭、川棚高校の長瀬貴之教諭、長崎南高校の岡本裕加教諭、長崎北高校の酒井聡子教諭に「言語活動」の授業実践例の提供をいただいた四人の先生方の御協力に深く感謝申し上げたい。

いずれも提案性、成果への期待がきわめて高い実践であり、当教育センターの「調査研究」Web ページ内に掲載している実践例をぜひ御覧いただきたい。

☆「言語活動の充実」が設定された経緯やより具体的な内容を加えた本編についても、御一読ください。

### 【参考文献】

- ・文部科学省（2010）『高等学校学習指導要領解説 国語編』教育出版
- ・文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社
- ・文部科学省（2008）「中央教育審議会 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」  
文部科学省 HP 〈[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf)〉
- ・教員研修センター(2010)「言語活動の充実を図る全体計画と授業の工夫」  
教員研修センターHP 〈 <http://www.nctd.go.jp/pdf1/gengokatsudou.pdf> 〉
- ・文部科学省（2012）「言語活動の充実に関する指導事例集 ～思考力，判断力，表現力等の育成に向けて～【高等学校版】」  
文部科学省 HP 〈[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/gengo/1322283.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1322283.htm)〉
- ・国立教育政策研究所 教育課程センター（2012）「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 国語）」国立教育政策研究所 HP  
〈[http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/kou/01\\_kou\\_kokugo.pdf](http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/kou/01_kou_kokugo.pdf)〉
- ・田中宏幸(2012)「言語活動の成立要件と指導上の工夫点」田中宏幸・大滝一登編著『中学校・高等学校 言語活動を軸とした国語授業の改革10のキーワード』（三省堂）
- ・長崎県教育センター(2011・2012) 調査研究『「書くこと」を中心にした言語活動 ―中学校・高校国語科における学力向上のための授業改善』長崎県教育センターHP  
〈<http://www.edu-c.pref.nagasaki.jp/cyouken/h22.web/a5/kenkyu.html>〉